

菅平生き物通信

ホームページ <http://www.sugadaira.tsukuba.ac.jp> 電子メール ikimono@sugadaira.tsukuba.ac.jp 電話 0268-74-2002 Fax 0268-74-2016

連載 ⑤ なんて生き物を守るの?

畑から雑草が消えたあと 田中健太

編集部にこんなお便りを頂きました。「田んぼの畦、畑の作物の邪魔をする雑草と格闘の日々ですが、作物に全く影響がなく雑草を生えなくする事はできないでしょうか。」お便りありがとうございます。お気持ちとてもよく分かります。恥ずかしながら私が耕している畑は、夏場の調査や実習から帰ってくる草ボウボウで、どうにも草取りが追いつきません。フー。

実はこの夢のような技術はもう使われています。アメリカには、モンサント社製の農薬ラウンドアップをまいた場所に、農薬が効かないようにした遺伝子組み換え作物が育ち、それ以外の植物はみんな枯れてしまうという広大な農地が広がっています。そんな穀物を



里山の風景

経済的価値があり、アメリカはそうした生物資源分野でも戦略的に動いています。たぶん、大自然と多様な生き物を守る国立公園と大規模農業生産地域を、広大な国土の中で使い分けているでしょう。

日本やヨーロッパでは、この農法は認められていません。農村の長い伝統があり、農地と自然が連続的に入り組んでいるこれらの地域では、アメリカのように自然を線引きするのは不可能です。日本人は、田んぼの畦や畑に咲く身近な草花を、雑草として取り除く



配慮しない国や生産者のほうが短期的には有利になるという側面が自由貿易にはつきまといまいます。これを続けてやがて国土が損なわれてしまうとみんな困ります。が、だからといって生活のかけがえのない農家一人一人に収益より自然を取ることをお願いするわけにはいきません。そこで、環境に對する配慮が競争の上で不利にならず、逆に収益につながるような社会の仕組みがどうしても必要になります。



を日本も大量に輸入しています。雑草取りの手間がないので、楽に安く生産でき国際競争に有利です。その代わり、その地域からは、たくさん草花や虫や動物達が姿を消していくことでしょうか。ここで連載してきたように、一見何の役に立たない生き物にも莫大な

だけなく、春の七草として味わい、秋の七草として愛でてきました。人間が利用している田畑と自然が入り組んだ景観を表す「里山」は今では国際語ですが、そこは日本で絶滅が危惧されている動植物が最も多く生息する場所の一つです。長い目で見れば、多様な生き物が暮らす日本の風土を守ることが、日本の文化だけでなく経済にとつても死活問題だと私は考えています。しかし、市場原理の中では目の前の利益が大切です。環境に

環境影響に對する規制、有機農法ラベルなどの認証制度、環境配慮農家への直接補償などはそうした仕組みとして働きうります。しかし、アメリカが日本を誘っている経済協定TPPでは、そうした仕組みを非関税障壁としてとつばらう可能性が有ります。遺伝子組み換え技術の拡大にもつながります。アメリカという国は遺伝子組み換えだけでなく、野外での放射性物質の研究利用や人間クローン細胞作成にも寛容で、他国が慎重になっている自然や倫理に對しておかまいたしな所があり、それが自由貿易や科学研究の国際的競争に有利に働いています。TPPは、そんなアメリカ流が有利になる競争ゲームで、日本人と自然との長い間の関わり方を根本から変えてしまうかもしれません。

写真 佐藤平太郎

<http://www.bunakaya.sakura.ne.jp/>

6月30日公開講座報告

草原観察から分かった新発見!

菅平高原実験センターの草原では、2011年からワラビ乱獲実験を始めました。ワラビ採集区を設け、その中は平日市民の方に自由にワラビを採っていたいただきました。その結果、今年はたくさんの方が来られ、採集区内のワラビはほとんど採り尽くされました。また、ワラビがなくなるだけでなく、採集区内は明らかに他の植物の背丈も低く、草の密度も低いスカスカの植生になりました。



風景の調査の草原撮影：毛利洋一

に驚くべきものでした。

植物種数は、ワラビ採集区の方が多かったのです(1m当たり平均…採集区12・5種、禁止区10・4種。ただし統計的差は無い)。また、調査で出

現した全66種中26種が採集区のみで出現した種であるのに対し、禁止区のみで出現した種は9種でした。つまり採集区の方が、種の多様性に富んでいたのです。

この結果を見る限り、ワラビ採りは植生に有害であるどころか、むしろ生物多様性の維持に役立っているメリットすら

あるといえそうです。でもここで結論を下すのは早計というもの。自然界の反応は、短期と長期で違う場合があるのです。今回の結果はあくまで1年限りの傾向です。ワラビ乱獲を何年も続けたとき、本当に草原の多様性が維持されるのか、その真理はまだ誰にもわかりません。



マレーシア旅行記 ②

マレーシア旅行記①で紹介したハエ以外にも水色のヨコバイ、採集禁止のアカエリトリバナアゲハ、カラフルなナナフシ、動きの速さが尋常でないアメンボ、巨大なウスバカゲロウなどを見ることができ、興奮しっぱなしの毎日でした。

実は私にとつて初海外旅行でして、マレーシアの壮大な自然に触れ、今までにない感動や興奮を味わうことができました。帰国直前では日本の自然に満足できなくなるとは心配になりましたが、いざ日本に戻り、その自然を見た時に、今まで当たり前のように見ていた日本の自然が「マレーシアにない自然」として際立って見えたのです。その時は鳥肌が立つほど感動し、本当にマレーシア旅行ではいい体験ができたと感じました。



カラフルなナナフシ



アカエリトリバナアゲハ

誠に遺憾でありました。

頂きました♡



(加藤大智)

紹介しよう!!
絶滅危惧種とは?

動植物のなかで、1個体も生存しなくなった状態を「絶滅」といいます。1966年に世界中の絶滅のおそれのある野生生物の現状を集約した『レッド・データ・ブック』が国際自然保護連合（ICUN）から発行され、危機の程度によって4段階のカテゴリが設定されました。その後ICUNは1989年からカテゴリの改訂を始め、1996年に新カテゴリに基づくレッド・リスト（レッド・データ・ブックの基礎となるリスト）を採択しました。これに伴い日本でも、95～99年に行ったレッド・リストの植物版作成と動物版見直し作業の際、ICUNに準じた新カテゴリを採用し、これにより「絶滅危惧」[Threatened]でくくられた絶滅のおそれのある種に関する新カテゴリが定義されました。

[1]絶滅危惧I類（CR+EN） 絶滅の危機に瀕している種

(a)絶滅危惧IA類 Critically Endangered（CR）
ごく近い将来に野生での絶滅の危険性がきわめて高い種

(b)絶滅危惧IB類 Endangered（EN） IA類ほどではないが、近い将来に野生での絶滅の危険性が高い種

[2]絶滅危惧II類 Vulnerable（VU） 絶滅の危険が増大しており、「絶滅危惧」へ移行するおそれのある種

となっています。
(池田雅子)

撮影：平成24年8月17日

季節の便り

phenology



バラ科バラ属カラフトイバラ
Rosa amblyotis C.A.Mey.



センター内スキ草原



ブナ科コナラ属ミズナラ
Quercus crispula Blume

公開講座のお知らせ

筑波大学菅平高原実験センターでは、春に続いて秋の公開講座を開講します。秋は、センター敷地内に現存している木造建築物大明神寮（築47年）の見学と信州大学工学部建築学科の梅千野助教をお招きして「山岳建築の保全（仮題）」と題して高地に残る木造建築の現状とこれらについてご講演をいただき、日々の生活に木造建築をどのようにとりいれていけるかを考えていきたいと思います。



- ①日時 平成24年10月20日（土）午前9時受付
大明神寮見学 午前9時30分～午前10時
- 講 演 午前10時～11時30分
- ②講師 信州大学工学部建築学科助教 梅千野成央
- ③場所 筑波大学菅平高原実験センター
- ④申込受付 平成24年10月1日～10月5日
- ⑤定員 30名 定員になり次第締め切ります。
- ⑥参加費 無料 保険料30円

問合せ・受付 筑波大学菅平高原実験センター
TEL 026817412002
FAX 026817412016

電子メール ikimono@sugadaira.tsukuba.ac.jp
担当：池田

本通信の印刷・配布は、東郷堂さんに
ご協力いただいております。

次号は10月
発行予定です